

新年度の取り組みから

話し合おう 素朴な農協づくり

高橋 五郎 (宮崎県/宮崎産業経営大学教授)

進行中の大規模リストラ

農協系統組織は全国的な大胆なリストラ計画を策定中である。2000年までに、農協数を現在の2260を550へ、人員は4万人削減、連合会の整理、農協の支店の統廃合等多岐にわたる。果たして実現できるかどうか疑問もないわけではないが、組織の存続を賭けた、これまでで最大の組織の合理化計画となることはまちがいない。

このような計画を農協組織が打ち出さざる得ない背景には、農協系統組織が意識するとしないとにかかわらず、実態として追求してきた営利企業化の方向がおおむね固まり、自らの行動原理をおおびらに、つまり名目の協同から実質の市場経済へ、名目の協調から実質の競争へと転換する見通しが確定したという、目に見えない動きがあるからである。

固まった農協の方向

このような農協系統組織に起きている潮流はいまに始まったことではなく、ここ40年以上にわたって徐々に形成されてきていたものであり、いよいよその体制と客観情勢が整ったというにすぎない。また、この潮流を農協系統組織の「変身」であるとか、協同組織としての基本を逸脱するものであるとかいっても、その批判は当たらないし無意味である。

農協の組織基盤は農民であるが、農協の設立以来、その最大の目的は農民のふところを豊かにす

るところにあったし、この50年間、農協系統組織はときには行き過ぎとも思えるほど、農民のふところを膨らませることに邁進してきたのである。それはなぜかといえば、当の農民自身が農協系統組織に対し期待した唯一の願いが、自分のふところを重くして欲しいという一語に尽きていたからである。この意味で、農協系統組織は主人公である農民の期待に答えるべく努力し、その期待に報いてきたといえるのである。つまり、農協系統組織は、はじめから農民の期待に沿うべく存在し、そのための組織作りをしてきたのであった。その集大成が今回のリストラである。

共同幻想から目覚め

そして一方においては、農協系統組織にかぶせられてきた共同幻想もあらわになりつつある。これもいいことである。その幻想とは、農協系統組織に着せられてきた「良い子集団」としての側面、つまり農協系統組織だけが環境保全と人間の健康増進、人類の平和と助け合いを追求してきているという思い込みや第三者（その多くは「農協研究者」）が加えた飾りである。この裏には、株式会社等の資本主義企業は「いじめっ子集団」であり、そこから資材を買ったり農産物を売っている農民は被害者であるといった意識である。

農民の気づき

今回のリストラは、「良い子集団」としての側

面の発展の芽を決定的に封鎖してしまう可能性がある。協同と協調という原理を体現する組織である協同組合が、農村から消えてなくなることもあり得ることになる。しかし、農民が求めてきたことはそのようなことではなく、ふとこを豊かにすることだから、それが農民に必要だというのは矛盾ではないかというかもしれない。確かに矛盾ではあるが、農民は、農協が市場経済的行動原理に支配されていく過程で合併や合理化を繰り返して、徐々に身近な存在でなくなりつつあることに気づき始めている点に注目しなければならない。この気づきは最近になって広がりつつあるので、農民は、農協に対し初恋の人がハイカラな着物を着て一人都会へ旅立って、自分とは住む世界が違う人間になってしまったかのような感覚を覚えるようになりつつある。

素朴な農協

農民が求める農協は、そんなハイカラなよそよそしい存在ではなくて、もっと身近で、センスは悪いが思いやりがあり憎めない幼なじみのような存在なのである。こうした農民の意識を理解することなく、企業のようにかっこよく生きるのだと意志を固めた農協が現在の農協であり、それはそれで生きるのに大変で、その世界で一人前になれると声援したい気分にもなる。

それはそれでよい。農協はそのようなものとして生きるがよい。問題は、農民の求めはじめたもっと素朴なもの、しかし組織の一員なのだと、帰属意識を確かな手応えとともに感じることができるものが要らないのか、ということである。それなしで、精神的にも実体的にも、個々の農民は「自立的に」生きることができ、農業経営者として生きることができるのか、ということである。たとえば、営農相談、農業情勢分析、この二つはとくに現在の農協の不得意な分野になりつつある。合併で指導員は本所勤務になり、農業情勢を職人的な手さばきでやり農民とともに談義できる人物は農協からいなくなりつつある。そのほかもろも

ろ、農民のためになることを生き甲斐とし重宝される者も消えつつある。

しかしこのような役割は組織人として教育されたからできるというものではない。キャラクターなのであり、キャラクターの持ち主を発見し、自由に活動できる環境を提供することが組織としての仕事であるべきはずが、やたら教育だ労働生産性向上だというから人はいなくなる。

そこで、筆者の問題意識である。農協ができなくなったことや農協がそもそもしなかった素朴なことをなんでもする農村協同組合をつくる運動、名付けて「素朴な農村協同組合をつくる運動」は成り立ちうるか。

まず話し合おう

協同総研の研究集会では、全国各地から人に集まってもらい、筆者が提案する「素朴な農村協同組合」づくりについて、みんなで話し合ってみてはくれませんか。筆者の意見に同意する人、反対する人、なんだか分からない人、もっと別の提案がある人、参加者の意見の幅が広がれば広いほど、話しの内容も豊かになると思います。また、現在の農協をどのように評価するかについての意見を出し合っても良いでしょう。

形式

パネルディスカッションとし、問題提起者（コーディネーター）、いまの農協徹底批判派1人（パネラー）、いまの農協徹底擁護派1人（同上）、第3者派1人（同上）、その他有識者。